

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目三八の二コーポル 幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 東京労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

「行革火ダルマ」内閣とヨーロッパのストライキ 2
社民党は自民党補完勢力化へすすむ 3

—新社会党は「中期計画」の策定を—

◇座談会◇

激動期はさらにつづく、出番をつくろう 5

—総選挙総括と新社会党の進路(上)—

いじめはさらに陰湿に 12

—第二回「職場いじめ一〇番」に相談殺到—

乱読、ツン読、私の読書 13

国鉄債務二八兆円処理に大増税は必至 14

—国民負担二四兆円、住専の四〇倍—

読者からのおたより 16 編集部だより 13

『社会通信』本誌の読者をご紹介ください

旬刊 社会通信

NO. 654

一九九六年二月二日号

一九九六年二月二日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

「行革火ダルマ」内閣とヨーロッパのストライキ

1996年11月21日発行

第二次橋本内閣が十一月七日成立した。三年三ヶ月ぶりの自民党単独内閣で、自民党本部は水を得た魚のように活気付いている。自民支持基盤が揺れ動き、閑古鳥が鳴いていたことがまるでウソのようである。なぜ自民の「復権」なのか。

土井さんと村山さんの貢献が大だった。旧社会党の路線転換が「五五年体制下のイデオロギー論争に終止符を打った」というのが宮澤喜一氏で、中曽根氏は「村山さんは身を殺して仁をなした人」と最大限にほめたたえる。財界は政治・経済の改革を求める。自民党を割って出た小沢を支持、期待したのも、自民党の優柔不断に業をにやしたからでもあつたろう。細川連立政権は旧社会党に「革命的」変化をもたらし、国家の基本的政策に意見の対立がなくなった。資本は政治の安定を求める。今度は小沢の性急な「改革論」がじゃまになった。小沢の役割は社会党をこわすことだったのだ。

自民の選挙公約は①省庁の半減・再編を最優先課題に規制緩和、官邸機能の強化、公務員削減（行政改革）、②消費税5%に引き上げ、法人税引き下げ（税制）、③公的介護保険制度の創設、医療保険制度の改悪（社会保障）、④大蔵省改革⇨金融の検査・監督を大蔵省から分離、持ち株会社解禁（行革・規制緩和）、⑤六・三・三制の抜本的改悪、大学教授の選任制の導入（教育）、⑥アジア太平洋地区への防衛拡大、PKO協立法見直し（安保・沖縄）だ。

この自民党と社民・さきがけは政策合意で閣外与党、民主党は政策協議で部分連合となり、新進は二大政上「反自民」、共産は国会での影響力行使になりふりかまわぬとなった。

橋本は「行革断行」を宣伝し、組閣にあたり、「省庁ではなく、国民の立場で大局的な見地でやってほしい」と述べている。橋本が直面し、実行しようとしている「行革」は何か。

まず財政・金融関係では、①財政再建、②法人税引き下げ・酒税引き上げ、③整備新幹線計画、④二七兆円にのぼる旧国鉄債務。つぎに産業関係では、①NTT分割、②郵政三事業の分割・民営化、③林野行政の民営化、④独禁法改正・持株会社解禁、⑤産業空洞化対策。福祉では、①患者本人の負担増を柱とする医療保険改悪、②二〇〇〇年度からの導入をめざす公的介護保険制度。行革では、①大蔵改革、②郵貯・簡保・郵便の民営化というものだ。

大蔵改革など官僚機構をゆるがす「行革」ができないことは百%確実だが、勤労諸社会層の生活を直撃する規制緩和は、労働組合の懐柔とも相まって進められることにならう。まず進むだろうものは①労働行政にかんする規制緩和、②受益者負担を口実に教育、福祉税の負担、③二七兆円にのぼる旧国鉄債務の国民負担、④そしてさらに労働組合を自民党にまきこむための公営企業の民営化政策だ。

今、ヨーロッパ諸国では欧州通貨統合にからむ財政改革に反発してストライキが吹き荒れ始めた。これは日本の一〜二年先の姿である。というのは、橋本の政策は財界の意を体し、勤労諸社会層にのみ犠牲を求めるからである。

(A)

社民党は自民党補完勢力化へすすむ

—新社会党は「中期計画」の策定を—

御園生教授の提言

新社会党に今全国の支持者から続々と激励の便りが寄せられている。新社会党は科学的手法で今度の選挙戦を総括し、次ぎのたたかいにむけての意思統一をはからなければならぬ。新社会党には全党的に敗北感はないといえる。何故なら「高い政治理念を掲げ、消費税反対などの勤労者の要求をしっかりと具体的政策として訴えて、力以上に果敢に闘いを展開できた」（上野建一党建設委員長・新社会十月二十九日号）からである。全党が一丸となつて全力をあげたたたかいは、敗れても次ぎの展望をもつことができるから精神的に爽やかなものである。総保守と対決する理念と、理念実現のための正しい組織政党論をもつ新社会党の前途は当分イバラの道であるとも、その先は明るいという確信がある。われわれの先達・山川均は戦前戦中の軍部ファシズム社会の中で、戦後は民主主義を空洞化する反動勢力に対して、科学的社会主義政党の確立のためにたたかいた。そのたたかから生れた言葉は今なおわれわれを限りなく激励して止まない。紹介することしよう。

「われわれの敵はわれわれを非難しわれわれを攻撃しわれわれを嘲笑して、われわれを征服しえたかのような幻影をいだくかもしれない。しかし最後に笑うものがよく笑う者だ。科学的理論の上に立つ者のみあらゆる敵を征服する」（一九五六年五月に三池労組によせた言葉・「山川均自伝より」）

総選挙の総括について、新社会党を支持して下さる方々からいろいろとご意見をいただいている。その中で東京経済大学の名誉教授である御園生等氏から大要次ぎのような言があった。①学者・文化人といわれる人達への協力量が不十分であった。ことに東京において。②新社会党の敗北は、結党間もないことからの準備不足が最大。その反省からいかに前進のための教訓を引き出すかにある。③新社会党が何を目指しているか、を改めて明確にすること。それも具体的に明らかにすること。「憲法擁護」だけでは当たり前すぎて訴える力が弱い。例えば、具体的に沖繩の問題にどう対処するのか、アジア全体の対日警戒感をどうするのか、など。④今四十年代五十代の働きざかりの人が一番心配しているのは「老後をどうするか」であることは周知の通り。これと関連してその「保証」のためなら増税も考えられる状況があります。福祉予算の充実のため大衆の納得できる方針が必要である。⑤当面の日本経済は回復困難な局面に到達していると思う。「規制緩和」は景気刺激にならない。アジアNIEsの経済発展と輸出の攻撃、日本産業空洞化にどう対処するか、大変困難な問題である。新しい産業を興すこと。問題はどのような産業を興すか。平凡な思いつきといわれるかも知れないが、例えば老人福祉施設、器械、医療機器、医薬品、ないし教育、レクリエーション関連等が考えられる。新しい産業を興すことを「国益」より「人類」という概念で考えるべきである。

御園生氏の提言はもっと長い文章になっているが要約した（乱暴な要約で失礼かも）。ご本人の了解をえて掲載させていただいた。われわれが真剣に考え討議すべき課題である。われわれの総括は、嘆いたり一人よがりのものであつてはならない。自らの運動を省みて成果と欠陥を明らかにするだけでなく、今後のたたかひにおける前進をはかるために

改めて日本と世界の情勢分析を行い、新社会党の諸方針を誤りなきものにしなければならぬ。山川均のいうように科学的理論の上に立つために。

中期党運動計画の策定を

今度の総選挙闘争は、新社会党にとっては九九年の統一自治体選挙に至る連続した政治決戦の一環であった。重要な選挙闘争を中心に考えただけでも次のようになってい

(一) 九六年〈総選挙闘争の総括〉

(二) 九七年四月東京都議選(各地で知事、市長、各議員の補選あり)

(三) 九八年七月参議院選挙(衆院選との同時選挙の可能性あり)

(四) 九九年四月統一自治体選挙

これと併行して、いろいろのたたかいかいがある。まさに目白押し政治日程となる。このような政治日程を勝ち抜くためには、並でない、よほど腰を据えた政治姿勢が求められる。そのために今度の総括(党外支援者の意見も反映させて)を含めた「中期計画」の策定が必要である。総支部、県本、本部とそれぞれ「計画」を策定してこれによって名実共に計画的科学的活動を展開すべきであろう。当然そのなかには黨員の拡大、『新社会』紙の拡張、財政計画が入っている。今次選挙では全国的に「新社会党」を知らない人々が多かった、という。基本的にはこれからの政治活動で知ってもらわねばならないが、われわれの大量宣伝も不足していた。これも中期計画の課題である。

これとも関連して「小選挙区制」は何としても改廃しなければならぬ。この制度で当選した現役の議員はこれを守る立場に立つであろう(多少の手直しには応ずるとしても)。民主党の鳩山代表などは、「比例・二百」を止めて三百の小選挙区だけでよいなどと発言している。保守・財界側の意見を代弁している始末である。民意を正しく反映させるには比例中心に考えるべきである。しかしいづれにせよ大きく困難な改廃運動である。大衆運動によって、民主主義を守る世論を盛り上げることがいよいよ重要になっている。政府・財界は自民党の一党支配体制の確立のためには小選挙区制で次の総選挙を切り抜けるつもりであり、参院選との同日選挙も視野に入れていであろう。それだけに本格的反動攻勢を打ち破ってゆくことを考えるとすれば、小選挙区制度とのたたかいは極めて重要である。

社民党の閣外協力の実態

社民党は六日一回目から首班指名選挙で、橋本自民党総裁に投票することを決定した。閣外協力の名のもとに事実上は入閣と少しも変わらない与党化している。首班指令のやり方に問題があるのではなく、社民党国会議員の政治姿勢の実態が自民党の補完勢力と成り下がっていることが困るのである。もともと自民党との連立によって、革新政党政存立の条件を捨ててきた社民党が、その総括もなく、選挙で惨敗したことで「閣外協力」という方策を打ち出したが、総括がないから、何が失敗で何がやってならないことだったかが明らかでない(できなかつた?)。

土井党首は村山内閣での社会党の変質した立場を、ほぼ肯定していることに最大の弱点のあることに気がついていない。今のような姿で社民党の再建はありえない。何かおかしな決定をするとかよく、苦渋の決断などというが、社民党の幹部は「土井のわがま、は許さない」(読売七日)などと放言している始末である。社民党の黨員は「土井党首で党改革を」などというのは、木に登って魚を求めることだと知るべきである。(政権研究班)

激動期はさらにつづく、出番をつくろう

—総選挙総括と新社会党の進路(上)—

司会 歴史的な総選挙が終わった。歴史的という理由は五つ。第一に新社会党の初陣、第二に始めての小選挙区比例並立制、第三にすさまじい政治不信、第四に「五五年体制」の動揺と崩壊、第五に「平和憲法」公布五〇年めの選挙だったことだ。

歴史的激動の時代はまだまだつづく。選挙をたたかった体験をもとに、①結果をどうみるか、②総選挙後の政治・社会のゆくえ、③新社会党のこれからの進路について、新社会党で選挙をたたかった仲間に勇気と展望を与える座談会としたい。

一番の関心事は、新社会党がどう選挙戦をたたかったか、これからどうするかだと思う。矢田部、山口両氏とともに指揮をとられた原さんから口火を切っていただきたい。

初戦の役割は十分果たせた

原 じつに楽しく運動できた。全国の仲間ががんばってくれましたから。当初、候補者は二〇名くらいと思ってた。小選挙区で四一名、比例は全ブロックに擁立できた。信じられないくらい活力を感じた。

重点地区は現職がいる中国と近畿、それに上野さんの南関東、東京もなんとかしたいと。四国には選挙本番中、本部から応援に行けなかったが、本当に立派にたたかっていた。結果は残念だったが、比例での百万弱の得票は初陣としては大成功だったと思う。難しかったのは「社会党とどうちがうか」を分かってもらうことだった。「あなた方は社民党を批判しているが、今までいっしょにやってきたんじゃないか」と。その説明に時間を要した。また「土井さん帰ってきてよかったね」って。「新」がついても時間が短かったから、社民党との違いを浸透させることは困難だった。社民党がすっかり信用なくしていただけに、そうなのかなという感じだった。総支部や支部が十分でなかっただけに力不足を感じたことも否めません。

マスコミはとにかくひどい。電波や活字に乗せるのは六党だけで、新社会党はいっさい無視。文書や電話で何度も申し入れ、抗議したけれど、ガンとしてきかなかった。「読売」は本場に露骨で、「社の勝手」との態度。主張を容れてくれたのは毎日だけだった。率直に言って、言論の自由どころか「言論ファッショ」の実態をいやというほど思い知らされた。「行革」より「マスコミ改革」がさき、今のマスコミの状況だ。

全国の同志からも中央に「あのテレビ報道はケシカラン、是正させろ」との叱咤激励をもらったが、機関誌「新社会」を拡大し、組織を強める他はないと改めて考えさせられた。ジャーナリズムは独占資本の意をくんで新社会党はつぶさにかんとかえってる。社会党をつぶしたのに新社会党としてよみ返ったんじゃないや困る、とやってるわけで、そんなところに依拠してやろうとはならない。

初戦でこれだけ候補を立てたかえったことは良かった。たとえ小さな記事でも新社会党の政策と存在がはじめて全国に知られた。知れわたったところまではいけなかったけれど、かなり知られた。兵庫のような大先輩の所は別に、どこも始めてだったから、敗北は残念だったが、初戦の役割は十分に果たせたと思う。

夜中に何度も起こされたが、本部にきた電話の反応は良かった。もう一つ問題としてあ

ったのは「共産党との違いが分からん」ということ。なぜ新社会党が必要かの分かり易い説明だ。これからの反動の時代に立ち向かうためには、憲法問題一つとっても共産党だけでよかるうはずがないとはいえるけれど。最終的には私たちが共産党とは違う運動のスタイルで、「新社会党ここにあり」の姿を見せる他ない。

存在示した新社会党

上野 小選挙区制についてはぼくらが言ったとおりになった。まずこれが一つ。原さんが最後に言った「共産党との違い」「社民党との違い」についても、結局は運動量。今度の選挙の最大の特徴は、新社会党がはじめて国民の前に立ったこと、運動を始めたことだ。小党で準備期間もない中でよくたたかかった。あらためて新社会党に自信もてた。宣伝カーで南関東を回ったが、反響はひじょうに良かった。「ガンバレ」って見ず知らずの人が声をかけてくれて。日を追うにつれ支持者はふえた。「週刊新社会」もふやせる自信もついた。新社会党の存在を示した。初陣にしては大成功だ。

ぼくはもつと票が出ると思ってた。しかし、小選挙区制のこわさを同時に思い知らされたのが実感だ。この選挙制度は首長選と同じで、焦点が上位一二人にしばらくは、三位以下はハネ飛ばされる。ぼくらは自分の主義・主張を中心に動くが、多くの有権者は死票を嫌う。原 新潟の稲村さんも同じことをおっしゃってた。「反応は良かった。その割に票が出なかった」と。

上野 小選挙区制度は制度面はもちろんだけど、「死票心理」を加速させる悪制だ。重複立候補ナンテ愚の愚でね。「落としたい」候補が通っちゃう。あとで論議になるんだろうけど、小選挙区制という選挙制度はさらに政治不信を増大させずにはおかないよ。

いろんな状況下での結束は貴重

坂牛 制度の面ふくめ、ぼくはきびしい事態を想定し選挙戦に臨んだ。新社会党をつくったのは、労働組合・地域運動の核として本物の運動をやるためだ。旧社会党時代、選挙で街頭演説したり、ピラまきやったことはなかったんだが、政連カーで毎日東京全域を回った。やるだけのことはやらないと思ってるね。

東京全体の状況はわからんが、練馬の同志はじつによく動いた。喜んで運動やってた。京成や清掃地域の仲間をよく出てくれた。じつに楽しくやったという感じ。このエネルギーをどう結集するかがこれからの課題だが、初戦として新社会党はよくやったよ。いろんな状況下で結束しただけに、その成果は貴重だ。

ピラもよくとってくれたんじゃない。社会党時代の二倍はとってくれた。「新社会党ってどういう党だ」と質問に来る人もいるし、日を追うごとに新社会党の存在は浸透した。しかしいかんせん時間がなかった。行動と方針をこれから浸透させていけば、モノになるとの印象だ。上出来とはいえないが、よくやったよ。まずそこが発時点だ。

人生観を変える総括論議必要

今村 残念だけど制度上、新社会党は政党要件を失った。衆院では国会でアピールできなくなった。だから、これからどう大衆に直接アピールするか問われる。坂牛さんは「新社会党は労働組合、地域運動の核として発展させなければならん」といわれた。同感だ。そのためにも「職場、地域で大衆宣伝、活動をよくやってる、新社会党が一番だ」といわれるような

活動スタイルをつくる、裾野をひろげるため異常なくらいこの分野に集中していくことだ。そのためにも余韻が残っている今、徹底的に議論する。議論なしに足固めはできない。

上野 「ていねい」な総括論議だ。

今村 その中で「私は人間が変わりました」というような論議。己れを皮むくような積極性がないと将来シンドイ。これを引き出せば前途洋々だ。いい足固めができる。

選挙戦に突入した時、私は「小選挙区だから当選することは容易じゃない、ギャツタ」の充実感をもつためには投票率は五五%になることが必要」と考えてた。ところが投票率は五二%。去年の参院選の投票率三八%よりはいい。

坂牛 そんなに低かったの。

今村 大地震の直後だったから。投票率に大衆の積極性を期待したが、一〇%の得票率に七〇%票たりなかった。負け惜しみになるかもしれないが、投票率が悪い時に敗けたのは不幸中の幸いだった。今度、投票率をよくすればというか、投票率がよくなる世の中の状況をわれわれがつくれば、勝てる見込みがでてくる。投票率がよかつたのに、われわれだけが惨敗したというのではどうしようもないことだから。

すさまじかつた政治不信

司会 投票率が低くなるだろうことは当初から予想されてた。しかし六〇%を割るなんて無効投票率は比例で四・五八%、小選挙区で二・九%ということだから、「棄権」「批判」票は六〇%を超える。その原因は何か。

坂牛 総選挙直前の「朝日」の政党支持率調査はすさまじい数字だしてた。「好きな政党なし」三八・二%、「答えない」一八・五%で、「支持政党なし」が五六・七%に達している。

まず選挙の争点がぼかされた。消費税率アップをめぐる政党の右往左往ね。とりわけ、小沢が三%を「すえおく」なんていいだし、完全にシラケちゃった。テレビの政策討論会でも共産党を除く五党の話は同じ。反対は共産党だけで司会者は当てようともしない。国民は争点のない選挙に興味を失った。社会党が存在した時は争点は明確だったんだけど。新社会党がテレビ等で積極的に出ればもう少し変わったかもしれないが、まったく無視で出れない。争点がないという感じになったんじゃないか。

今村 直前、沖繩の問題で風船が半分にしぼんだ。残りは消費税になったが、例の小沢発言が政治不信に輪をかけた。消費税への反発はひじょうに強かったが、積極性がなかった。選挙直前、ぼくらが消費税反対をいうと、「おまえら裏切ったじゃないか」との反論が帰ってくる。「裏切ったのは社民党、ぼくらはそれに反対を貫ぬき新社会党をつくった。消費税反対は新社会党誕生の原点」というと、「あんたらはこの次裏切るのか」とくる。政治はなにもかも裏切る、だらしなくするとの受け止めが本当に強かった。それらが相和して「無気力」「シラケ」が生み出されている。

司会 私、最近川柳に関心がある。幕末維新前後の反動期、川柳や狂歌が大流行した。新聞の「川柳欄」は政治不信一色だ。最近おもしろかつたのを上げると、公約無視を憤るのに「口車乗せて街ゆく選挙カー」「行革の大合唱に鬼笑う」「バラ咲けば公約が散る永田町」、政治家不信では「落としたい人はたくさんいる選挙」「反動で当選あとにくる反り身」「朝な夕な米つきバツタ駅に湧き」、さらに「特大のほら貝積んで選挙カー」という具合。総保守状況を告発する句に「似たような石の中から採す玉」なんて痛烈なものもあるし、社民党・三宅坂への批判はさらに強い。「ノーヒットノーランに泣く三宅坂」「だめなもの

やはりだめだったかおたかさん」と。

原 政治不信の原因を思いつくままあげると、政党の公約無視、労組の墮落と組合員の政治意識の後退、政治家の節操のなさ、それに今度の新しい選挙制度が複合している。

上野 勤労者層の政治意識の後退が最大の問題だ。その政治意識の低さが保守をのさばらせ、社民党と新社会党の区別をつかなくしている。実践ふくめた教宣活動のあり方が問われている。

坂牛 同感だ。選挙で「裏切り者」が落ちない。片山内閣時代の失政では、片山はじめ西尾等々、「裏切り者」がバタバタ落ちた。ところが富山も土井も通ってる。労働者の批判力、政治意識が落ちた証拠だ。なぜ村山が通ったのかね。

原 自民党が村山当選に全力をつくした。まず大分一区の自民党候補者を比例区のトップにランク、大分の仲間からは「村山さんへの自民党の肩入れはものすごかった。村山の集会は自民主導だった」との話を聞いた。大分三区で通った横光さんところは自民党は候補をたててない。それで社民党小選挙区の当選者は大分の二人、土井、沖繩の上原さんの四人となった。

坂牛 上原も「裏切り者」だよ。なんでこんな人が通るのかね。とにかく労働者の政治意識が落ちた。

司会 今度の選挙で引退した後藤田正晴は、「朝日」(十月二二日付)の座談会で「社会党を支えた労組員に意識変革が起きた」ことが、今日の政治の流れをつくったと次のように述べている。

「五五年体制が終わり、イデオロギー中心の争いがなくなった。社会党を支えた労組員に意識変革が起きた。(社会党が) 政権に座った結果、レーデンデートル(存在理由) だった反安保、反自衛隊を(逆に) 認めざるをえなくなった。歴史の検証に立てば、それなりの役割を果たしたが、気の毒だった」と。

坂牛 そのとうりじゃない。無党派の拡大、政治不信は昔からあったんじゃない。細川連立政権以降のことだろう。

上野 一番悪いのは村山、そして土井さんだ。第二次大戦後、自民党がやりたくてもできなかったことを、土井さんは議長として村山さんは社会党委員長としてやった。政治家や政党は己の公約に責任を持てばいい。ところが公約でやらないといった小選挙区導入、消費税率アップ、コメの自由化、安保・自衛隊等全部転換した。自民党からすれば「村山さんは救世主」になった。

原 その村山、土井両氏にまだ期待している人がいる。

上野 そんな人いるの。自民党や保守から笑われるだけなのにね。

村山さんは身を殺して仁をなした

司会 さきの後藤田の発言もそうだけど、中曽根はもっとユニークだ。「朝日」(九月二五日付)のインタビューで「村山さんは身を殺して仁をなした人」と、こうしゃべっている。少し長くなるが、総選挙のさなかで目を通していない人が多いはずだから、関連部分を紹介します。

「―自社と連立の評価は、

中曽根 過渡期の政権として、ある役目を果たしたが、日本再建のための本格政権ではなかった。選挙民の選挙の洗礼を受けてない、正統性の欠落した政権。公約と違ったことや

つちまつた。それが怒りを買って青島・ノック現象がでた。

だが、この間に社会党は政権の見習いをやり、自衛隊や安保条約、君が代、日の丸を認めた。この政権学校も、そろそろ卒業ですね。体は崩れてずさずさになったというか、村山（富市）さんは身を殺して仁をなした人ですね。

―協議離婚しなさいといっていました、
中曽根 社会党（当時）のために言っただけです。自民党の影に添って連立政権を組んでいたら、次の総選挙では見るも無残で解体する。できるだけ早く自分の旗をしっかりと立てなさい、と。それをやっていたら今のような原子崩壊みたいなことはなかったでしょう」

上野 「身を殺して仁をなす人」か。論語ですな。中曽根も安岡生篤なんかの薫陶を受けてるからね。

司会 私、最近よく財界や保守の側の勉強会、講演会に行くんです。先日宮澤喜一の「今なぜ護憲か」と題する講演会に行った。後藤田、中曽根そして宮澤も「社会党の路線転換」を「神風」のように思っている。総保守にとって、村山さん土井さんはまさに「救世主」との評価だ。

上野 社民党にまだ恋している人は少なくないけれど、早く新社会党でいっしょにやりたと思う。社民党の限界はもうはつきりしてるんだから。

今村 選挙制度の面から政治不信は拡大する。実際選挙をやった人はすぐ分かるだろうけど、公選ハガキが四万枚出せる。ピラやチラシの数もふえた。みかけは言論戦をひろげる形をとっている。しかし、選挙運動は二日間短縮されて十二日。この二日間のシワ寄せがハガキに行く。ハガキを出すために現場に落とし、書いてもらい、集め、重複を避けるためのカルタ取りというように相当の時間が必要だ。

私のところは兵庫一区。三つの区で構成され、県会の場合ハガキは一人当たり八千枚だから、三区あわせ二万四千枚。公選法だと四万枚だからざっと五割り増しで、集めるのが精一杯。ハガキの数がふえたって選挙期間が短くなればなんにもならん。

原 政党ハガキがその上に加わり、小選挙区の範囲では多すぎるくらいだ。

今村 個人ピラ、政党ピラだって同じ。宣伝車がいて声が聞こえる範囲でしかまけないのだから、技術的にまけるわけがない。数だけふやし効果がないようにしている。とにかく大元でグツとしばって、細部でもインチキだけだった。

原 投票率を悪くするのは、自分の好きな政党の候補者が出ないことだ。全国三百小選挙区に候補出せるのは自民党と新進党、それに共産党だけ。この面から見ても投票率はむろん政治不信をさらに高めることになる。比例区選挙には戸惑いがあったようだが。

今村 日本の選挙制度は長い間、候補者選挙が主で、比例は従だった。だから比例のためだけに選挙に行くのはよほど政治意識の高い人で、一般的には意中の候補がいるから投票に行く。そして比例やてきた。だから意中の候補がいなければ投票率は落ちる。

上野 小選挙制度についてはほくらがいつてきたとおりだった。死票の増大、低い得票率で高い議席率、ブロック比例のごまかしと重複立候補と惜敗率による敗者復活、大政党と小政党の差別、さらには政党要件満たす党とそうでない政党との差別といった具合にね。その結果、総保守が圧倒的な勝利をおさめ、「護憲の政治勢力」がはじき出された。

比例ブロックでなければ九五万票の新社会党はゼロでなく三議席相当するし、完全な比例代表なら八議席になる。共産党に当てはめれば二六議席と六五議席。とにかく悪い制度だ。

今村 候補者も二世、三世ばかりになっちゃった。ロボットみたいな人物ばかりで、政治

家への熱い想いがなくなった。なんとかあの人物を育ててやろうという時代じゃない。鳩山一郎の二人の孫がなんで民主党なんだって。

第二次世界大戦後五〇年たって、一つの階級社会があらわれはじめた。ちょうど徳川幕藩体制期のような三百諸侯に示されるようなね。

社会党の方針転換がオール保守をつくった

原 二代目、三代目からは役人ですよ。くり返しになるが、政治不信のもっとも大きな原因は、社会党がひっくり返ったこと、それと公約をいっさい無視し、「やりません」といったことをやっちゃったことですな。

坂牛 オール保守になっちゃった。これじゃ面白くない。共産党だけじゃ対立するものがない。大根役者ばかりの芝居をみせられているようなものだ。びっくりするのは、細川いろいろの連立政権を評価する考えが、左派といわれる人にあることだ。

上野 細川いろいろの連立政権は、保守の一派支配体制時代をいかにつくるかの過程なんだ。そのために連立だろうがなんだろうがすべて利用するのが自民党。小選挙区制の導入のねらいはそれしかない。

坂牛 自民党がやれなかったことを社会党がやったんだ。だから自民党は自分の基盤を失うことなく、今度の結果になった。その反動で己の支持基盤を掘り崩したのが社会党。自民党にしてみればうまくいきすぎたんじゃない。ひじょうにうまくいって、社会党が自滅した過程ととらえる必要がある。社会党は利用されただけ。

上野 さきの中曽根の発言をみれば分かる。脳天気なことっていないで、事実を冷静にみてほしい。

労働者教育はこれからの最大の課題

司会 旧社会党の崩壊の背後に労働組合の変質があった。

上野 大労組一部幹部の罪は万死に値する。だけどそれにふり回されズルズル今の事態を迎えた我々の責任も大きい。今日の労働運動の状況は国鉄攻撃、そして労戦再編成の完結で予想されていた。連合発足いろいろの労働者の政治意識の後退はひどい。京成はもっとも強いといわれる組合で、新社会党でがんばっている同志も多いが、それでもその影響を振り払っていない。

京成のある支部が行った政治意識調査の結果をまず「支持なし」から追うと一九七一年二二・七％、一九八〇年二九・四％、一九九一年三七・八％、そして九六年六三・五％。さきほど来の話のように九〇年以降、猛烈に拡大している。次に旧社会党の支持率だが、それぞれ五三・六％、四三・四％、三八・七％、九六年になると急降下して社民党支持率は一一・五％。これは六月の調査だから今はもっと落ちてはいるはずだ。

面白いのは旧自民勢力の支持率も落ちてくることなんだ。それぞれ五・九％、一〇・〇％、一七・四％、九六年はといえば自民六・七％、新進三・三％、さきがけ〇・八％だから旧自民勢力支持は一〇・八％。これを九一年とくらべると九六年には共産を除く旧野党が旧自民勢力に吸収されているわけだから、自民一七・四％、民社一・一％、公明一・七％を加えるとじつに二〇・二％になる。だから旧自民もやはり大きく支持率を減らし、旧社会党支持者だけでなく、自民党支持者も「支持なし」に転換している。京成のように旧社会党員労組協議会（党員協）が解散し、新しいグループをつくって活動している労組ですら

こんな状況だから、他は推して知るべきだと思う。

今村 従来の労組黨員協は社会党が解散した時点で名実ともに崩壊し、異質な政党支持に変わった。民主党結党前後の旧社会党支持組合、「連帯する会」「民主・リベラル勢力推進労組会議」の動きはその反映にすぎないということだ。一部幹部を除き、政治の流れに戸惑ってるだけ。職場は率直に言って何がなんだか分からないといういわば「真空状態」におかれてきた。政治意識は分散するどころか、後退しているんじゃないか。

坂牛 労働組合が労働組合でなくなっちゃった。大幹部の頭は資本と一体化している。つくり直す他ないよ。

民主党は旧社会党支持組合の止まり木

司会 立派な活動家も機関決定に弱い。心ならずも自分の思想・信条とちがうことやっている。

上野 そうした態度が労組をさらに悪くするのね。勉強するのは自分で考え、行動するためにやるもんだと、もう一度基本から学び直すことが必要だ。労働組合は大衆団体でいろいろ考えの持ち主がいるのは当たり前。だけど政党は政治団体だからね。自己の生き方の問題で、飯の問題じゃない。

司会 専従者が苦しんでいた。飯と理論をどう整合させるかと。

坂牛 多くの場合、飯が優先するでしょう。これは聞いた話だけど、ある組合では当局と同じ給与水準に賃金表を引き上げたつてんだ。とんでもないことだ。労働組合員の生活を知らず、何が労働組合だ。役員だつてね。だから意識も生活も資本と一体化していく。労働者意識の崩壊だ。

原 その結果、事業拡大が労組の主要方針とされるわけですか。

司会 それが選挙戦における労働組合の政党支持にあらわれた。連合傘下のほとんどの組合が共産、新社会を除く党に保険をかけた。労働組合がはじめて公然と自民党候補を推せんしたとマスコミが報じた動きです。

坂牛 大競争時代の宣伝と実際が労働組の根幹をゆさぶっている。

原 労組は戦績はどうだったのか。

司会 旧社会党支持組合で作る「労組選対」は、推せん七四名。当選は小選挙区一四、比例二四の三八名。政党別内訳は社民八、新進五、民改連、無所属各一、そして民主二三名。旧民社党支持組合の「友愛会」は、三四名を推薦。当選は小選挙区、比例区各一二の二四名。政党別内訳は新進だ。

原 旧社会党支持組合はなぜ民主党支援したのか。

司会 社民党は消えてなくなる。そんな党に組織をかけられぬがホンネ。従来の社会党支持を全面的に見直し自民、新進支持では現場組合員の反発は必至。だから当面民主党を「止まり木」にした。

原 民主党でやっていゆけるか。

司会 幹部は誰一人そう思っていないと思う。彼らは「民主・リベラル」、宮澤や後藤田にいわせれば「ソシアル・デモクラツツ」になるが、鳩山兄弟が「ソシアル・デモクラツツ」なんてシヤレにもならん。分解は早いのではないか。あとの話に関連するだろうが。(つづく)

※ご出席いただいた方は発言順に原野人、上野建一、坂牛哲郎、今村稔の各氏。司会は本誌編集部が担当しました。

いじめはさらに陰湿に

—第二回「職場いじめ一〇番」に千四十五件の相談殺到—

十月十日から十四日までの五日間、管理職ユニオンは女性ユニオン東京や全国一般東京労組、日本労働弁護団、アィム'89（東京・西多摩地区教職員組合）、ヒューマンリフレックスセンターの皆さん等の協力を得て、第二回職場いじめ一〇番の電話相談に取り組んだ。六月の第一回の電話相談の経験から、かなり周到な準備をしたが、それでも間に合わないほどに、多くの電話相談が殺到した。

詳細はコンピュータ集計の結果や、十月二四日の反省会等で逐次明らかにされようが、今回は概要のみを報告する。

相談の総数は、北海道から沖縄まで全国各地から千四十五件であった。電話は十台用意したが、ほとんどの時間十本ともふさがり、あいた電話器がみられたのは、わずかの時間でしかなかった。一日平均二百件を越えるということは、一台あたり一日（八時間）二十本以上をうけつけたということであり、一件の相談に二十分から三十分かかったということになる。

女性の相談の多さ・メンタルヘルスの重要性・いじめの陰湿化

相談内容で特徴的なことは、設楽書記長のもとによれば、三点ある。第一は、一回目と同様、女性の相談が六割近くの多くを占め、女性の働く環境の悪さがはっきり表れていることである。三十歳台まではセクシャルハラスメントなどの職場の関係をめぐる相談が多く、それ以上の年齢では、職場からの追い出し・退職強要などの相談が多かった。

第二は、私たちが第一回の相談の経験から学んで積極的に対処しようとしたこともあって、メンタルヘルスケアの必要と思われる相談が非常に多かったということである。職場も社会もすすんでいて、精神を病むに至るといふケースが多いのには、愕然とせざるをえない。この分野では、ヒューマンリフレックスセンターの若い人たちの協力が極めて貴重だった。彼女ら・彼らは、「いい経験をした」と語ってくれたが、「労働問題で悩んでいる相談者に対しては励ましが必要だが、メンタルヘルスの相談者は、逆に励ましてはならない。この判断を今後どのようにするか」と、極めて重要な問題提起も受けている。

特徴の第三は、いじめの陰湿化である。自殺した遺族からの相談や、自殺未遂の経験者からの相談は、前回を上回った。自殺を考えているとの相談もあり、相談を受けつつ慄然とすることもあった。また、暴力行為も増えているようであり、「いじめ」と表現するのが妥当かどうかと思われるようなケースもある。要するに、日本の社会とその中の会社は、文字通り筆舌に尽くしがたい状況にあるということであろう。

運動としての「電話相談」活動の展望

全く別の角度から今回の相談活動をみることもできる。相談活動を組織した私たちの側からみると、「運動としての電話相談活動」の展望がみえてくる。日本労働弁護団の徳住弁護士も指摘されたが、「いじめ一〇番」の活動が、運動として広がり、発展する可能性がみえてきたことである。

今回の準備の過程で、当初電話十台に対応する必要人員が一日当たり最低五十人とされ、それだけの参加者を確保できるかといぶかる向きもあったが、実際にはそれを超える人が集まった。実際、事前の三回の研修セミナーには、平均して七十名を超える参加者があり（小さな労働組合の常識では、五十名を超える人を「動員」して集会を開くのは、なかなか困難なことであるし、短期間にそれを繰り返すのはもっと難しい）、相談当日も、十台の電話に取りつき、その結果をカルテに清書し、さらにそれをコンピュータに入力するという作業を、ほとんど滞りなく行ったということは、ものすごいエネルギーの発揮であ

った。この可能性を今後にいかにか生かすか、課題としても大きい。運動として展開するとなると、最重要の課題は、私たちが直接面談することのできない地方の相談窓口の確保である。今回は多くの協力労組の援助を得たが、それでも全国をカバーすることはとてもできず、一部相談の殺到した地方からは「これ以上の受け入れはできない」と言われることもあった。管理職ユニオンの活動で積み重ねてきた、「きのうの相談者が今日は相談を受ける」というスタイルで、全国の相談者の協力を得ることや、現に全国に広がっている管理職ユニオンの組合員にいかにか協力してもらえるかなど、真剣に検討したい。

乱読、ツン読、私の読書

ある日、私の前にある本棚をながめて、ふと思った。いったい何冊位あるのだろうか、と。さっそく「記録」を見たら、雑誌・パンフ類を除いて一、四〇〇冊位だった。本の種類・内容も多岐に渡ってきた。それもこ十年位前からだと思ふ。以前は「社会科学」や「労働運動」に関するものほとんど限定されていた。今では、小説はもとより、音楽、美術書関係、随筆、時事的なものなど、興味本位に気まぐれの読書である。

ちなみにこの二ヶ月(七・八月)に読んだ本は以下の通りである。『花』(安野光雅・絵／杉本秀太郎・文、岩波書店)、『落日の宴』(吉村昭著、講談社)、『凜として咲く華』(一番ヶ瀬康子著、小学館)、『歴史について』(木下順二著、講談社文芸文庫)、『いじめを考える』(なだいなだ著、岩波ジュニア新書)、『天声人語の七年』(白井健策著、河出書房新社)、『拒絶する沖繩』(大田昌秀著、近代文芸社)、『沖繩・苦難の現代史』(編者・沖繩県、岩波同時代ライブラリー)、『スペイン断章・上』(堀田善衛著、集英社文庫)、『戦争と沖繩』(池宮城秀意著、岩波ジュニア新書)、『ひめゆりの沖繩戦』(伊波園子著、岩波ジュニア新書)、『豊かさのかけに』(佐高信著、岩波ジュニア新書)、『ハンドブック子供の権利条約』(中野光／小笠毅編著、岩波ジュニア新書)、『沖繩・戦争と平和』(大田昌秀著、朝日文庫)、『風と共に去りぬ』のアメリカ・南部と人種問題・『(青木富貴子著、岩波新書)、『アメリカの心の歌』(長田弘著、岩波新書)、『脳を究める』(立花隆著、朝日新聞社)、『モーツアルト考』(池内紀著、講談社学術文庫)、『精神と物質』(立花隆／利根川進、文春文庫)以上、十九冊。何と「精神分裂症」ぎみの読書だろう、と思った。これ以上本が増えると、もうじき収納スペースがなくなりそうである。(国労・M)

◇編集部だより◇

▽読書の秋。どんな本をお読みかしら。編集子はこの半年、乱読。「本ばかり買って」と事務局でひんしゆくを買っています。

▽九一年秋以降の世界情勢の変化はすさまじい。「社会主義世界体制」、「総評・社会党ブロック」も自滅。「民主主義」「市場経済」つまりムキダシの資本主義が闊歩している。

▽この変化から日本労働運動、社会主義運動再建の方策をどう採るかが、編集子の問題意識。資本主義で労働者階級に未来のないことは自明。悪戦苦闘はもうしばらく続きそうである。

▽それにしても国労のMさんのようなスゴイ読書家がいらっしやるのですね。

▽灰原茂雄さんのご夫人が亡くなりました。十一月一日に通夜、二日に葬儀がしめやかに行われました。灰原さんは愛妻家でいらっしやいました。一月に「励ます会」を開こうと準備中です。参加をご希望の方は「通信社」までご連絡を！

▽いつものお願い。活動報告、資料、そして今お考えのこと、ぜひお送りください。編集子の最大の楽しみです。ぜひぜひよろしく。あわせて原稿も。

国鉄債務二八兆円処理に大増税は必至

— 国民負担二四兆円、住専の四〇倍 —

「財源の手当は財政全体の中で検討すべきだ。いずれにしろ一定の分野の国民に負担をおかけすることになる」（日経）「七日付亀井運輸相談」、「最後は政治がリーダーシップを発揮し、決断しなければならぬ。そのためにも、国民の納得できる実質的な議論を期待したい」（亀井正夫・元国鉄分割民営化委員長談、同一六日付）。

これからの発言は、天文学的数字にふくれあがった国鉄清算事業団債務が、いよいよ政治問題として浮上してきたことを示す。国鉄が分割・民営化されたのは八七年四月。今年で一〇年目になり、政治は来年度末までに、清算事業団債務の処理をせまられる。運輸省は九七年度予算で抜本処理策を決着させるよう概算要求したから、国民一人当たり二〇万円もの金額をいったい誰がどうやって負担するのが問われることになるわけだ。あの住専の一次損失処理に要した税金は六八五〇億円、国民一人当たり五千円だから国鉄債務はその三〇倍をこえる。国鉄の債務はなぜこんなにふくらんだのか。

民営化時、国鉄再建監理委員会は二五・五兆円を国鉄清算事業団、五・九兆円をJR（本州旅客三社と貨物）、五・七兆円を新幹線保有機構（現鉄道整備基金）とするものだった。JR三社や新幹線保有機構は借金返済のための優遇措置、たとえば①固定資産税軽減、②分割・民営化前の一三年間に一回の運賃値上げ、③赤字路線の切り捨て、④国鉄マンの大量解雇等が二重三重に組み込まれたのだから、赤字になるのは当然のことで、「税金を払えるようになった」「過去九年、運賃値上げしなかった」などはタワ言にすぎぬ。

問題は清算事業団債務二五・六兆円の返済計画だ。当初、土地売却収入七・七兆円、株式等売却収入一・二兆円、新幹線保有機構二・九兆円で一三・八兆円が国民負担とされたところが、清算事業団債務は九六年度首で二七・六兆円にまでふくらんだ。今のままでは見直し期限の九七年三月末には国民負担分は二〇兆円から二四兆円になるといわれる。

旧国鉄は日本一の大地主だ。琵琶湖にはほぼ匹敵するといわれる所有地の面積は八八〇〇ヘクタール。九一年間に五一〇〇ヘクタールの土地、営団地下鉄等の所有株式、さらにはJR東株二五〇万株を売り払ったにもかかわらず、借金は減るどころか二兆一〇〇〇億円もふえてしまったのだ。その収支決算は売却益一一・三兆円、利払い一三・四兆円によるものだ。分割・民営化の責任者は「バブルとその破裂が原因」といいわけに終始する。バブルを引き起こしたのが分割・民営化なら、バブルの破裂で破綻したのが分割・民営化という皮肉な結果になったわけで、因果応報とはまさにこのことである。

分割・民営化の見直し期限は九七年度末、いったい借金はどこまでふくれあがるのか。九六年度首の借金総額は二七・六兆円。借金の内訳は①財政投融资資金一五・五兆円、②

民間資金二・七兆円、③一般会計五・三兆円④将来かかる費用（年金や恩給の負担など）三・八兆円というもの。

財投資金がじつに五七％強にのぼるのが第一の特徴だ。政府資金だから利率は低いと思うのは素人の判断で、この低金利時代一五・五兆円の平均利率はなんと五・三五％にものぼる。ちなみに八七年度首の財投資金は八・九兆円だったのだから、過去九年間に六・六兆円も膨張したことになる。

第二の特徴は民間資金が優先的に返済されていることだ。八七年度首の総額は四・二兆円だったから一・六兆が返された。

第三の特徴は大蔵省はもつともうすぎたない高利貸しであることだ。さきにもみたが財投資金の平均利率は五・三五％、民間資金は二・四四％。高い利子部分の借金を低利の資金に変えるのは資本の理論からすれば当たり前のことだが、大蔵省はそれを認めない。

二七・六兆円の平均利率は四・三一％だから、利子だけで一・二兆円にのぼる。だから九七年度末の借金総額は二七・六兆円プラス一・二兆円イコール二八・五兆円となる。

次にこれから二年（九六・九七年度）の借金返済計画はどうか。売り食いでやせ細る一方の旧国鉄資産は今や三五〇〇ヘクタールの土地を残すのみ。これを全部売り切っても約三兆円。さらにJR三社（東、東海、西）の株式をすべて売っても約二・五兆円といわれるから、売却益は三兆円プラス二・五兆円イコール五・五兆円ではない。

こうして単純に計算しても二八・五兆円マイナス五・五兆円イコール二三兆円もの借金が残されることになる。赤ん坊から百歳をこえる国民一人当たりなんと二〇万円の負担だ。これに約一兆円の年金資金、さらには二千人の清算事業団労働者の雇用対策費が加わるから、「財政再建」をかけ声におこなわれた分割・民営化は、①旧国鉄時代の借金地獄を再来させただけでなく、②二〇万人におよぶ国鉄マンとその家族たち百万人に深い傷跡を残し、③一〇四七人の苦しみ、④レールを奪われた過疎地に累々たる屍を残すだけの天下の大罪でしかなかったのである。

一人当たり二〇万円超にもなる「国民負担」を政府はどう処理しようとしているのだろうか。住専の第一次損失処理ですら、「失政のつけをなぜ国民に回すのか」と国会は大混乱になった。国鉄債務はその四〇倍だ。「フザケルナ」とえんさの声が国会を取り巻くことは必至だろう。しかも政治家は小選挙区制導入や消費税導入・税率アップにみられるように、己のバッチに汲々とするのみだから、「政治的リーダーシップ」など期待できやうはずもなく、官僚が見取り図を描くことになろう。

処理策は百家争鳴だ。運輸省は省の枠をこえた検討が必要、一般会計に移し財政全体で処理といい、財政審（大蔵大臣の諮問機関）は①利用者負担、②歳出削減、③広範囲の増税を謳い、JR各社は負担増には絶対反対、大蔵省は政治の決断が必要、ミサワホーム社長は「相続税軽減の恩典つけた無利子・非課税国債」のアイデアではいかかという具合だ。国家財政はまっ赤赤。財投資金の借り換えすらみとめないのが大蔵省だから、処理策は、全額国民負担に転嫁されることは必至だろう。いずれにせよ処理案は、①増税、②歳出削減、③運賃値上げの三つの組み合わせでおこなわれることになる。

◇ 読者からのおたより ◇

残念 新社会党、議席とれず本当に残念。引き続き一年分の誌代送ります。(留萌・M)
編集部より 初陣、勝ちたかった。北海道十万票余。ごりっば、お疲れさまでした。

展望・拡大の道は大きい 総選挙、残念な結果となりましたが展望はあり、拡大の道は大
きい。貴社の任務、ますます重くなりますが、がんばって。(東京・K)

編集部より 大競争で労働条件の悪化は必至。労組への反発も強まっているようです。
労組に新社会党の精神的影響力を植え付けましょうよ。ご活躍を。

昔の同志、仲間は 新社会党一議席も取れず残念。十年前に「反独占・反自民・社会主義」
をめざした仲間、同志の現状は、今どうなっているのでしょうか。(山形・M)

編集部より 情勢は「革命的」というほどに変わりました。新たな情勢下の進路が究め
られなければなりません。習慣、考え方を要するのにはむづかしい。

労働組合結成 十月十五日、労働組合を結成。お盆から準備して、約二ヶ月かけて結成。
二七〇名の会社で一三五名を結集、そのほとんどが結成大会に参加。きっかけは夏一時金
が「寸志」で、会社はこれで一億円以上節約、怒りが爆発したものです。全国一般に加盟。
これからの正念場。久しぶりの大型加入ではりきっています。(S・M)

編集部より おめでとう。たいへんだったでしょう。他の経験を聞いても、シンドイの
は結成後です、ご活躍を。

新たな飛躍めざす 新社会党、敗北をバネに新たな飛躍をめざしましょう。(関 晴正)
労働者・市民の立場から たいへん厳しい選挙結果となりましたが、これから地道に粘り
強く労働者・市民の立場の新社会党を拓めていかなければと考えています。まずは矛盾の
塊の小選挙区制を変えなくては。(札幌・N)

編集部より 北海道では民主党への移行で「社会新報」中止、十二月には社民党も消滅
とのこと。がんばろうよ、新社会党を「労働者・市民」の党として大きくするために。
かつては労働組合のスローガンであった それは、行革は公務員労働者の首切り、余った
予算を大企業に振り分けるものであり、国民サービスの低下になるからである。現在は労
働組合も行革を叫び、行革を旗印にした政党を支持している。その支持を受けた民主党は、
労働組合の意向に動かされる事はないとコメントし、人気を背景に強い姿勢だ。再度、行
革の意味を問題にしようではないか。(鹿児島・K)

一級四号の給料表 九月三〇日人事院勧告が出された。その行政職給料表(一)は一級四
号から始まっている。高卒程度は一級五号から始まっているので、職員給料には全く使わ
れない、その前の一級四号とは、いったい何のためにあるのだろうか。

この給料表以外に、東京都には標準単価表というものがある。これは臨時職員や委託人件費
の標準単価すなわち、一般事務補助や肉体労働などの一日一人当たりの賃金を定めたものであ
る。昨年度は最低六六四〇円であり、月に換算すると二三六一二〇円となる。昨年度の一級四
号は一三万六一〇〇円であり、標準単価とほとんど一致する。とすると一級四号は臨時職員や
委託労働者のための給料表に他ならないということになる。今回の勧告で一級四号は一三万七
五〇〇円であり、これで今年の標準単価、多分六七一〇円だろうということが想像出来る。

この一三万七五〇〇円は最低賃金ではない。これが臨時職員や委託労働者から見れば、
平均賃金と同じなのである。東京都には職員の高卒初任給より少ない賃金で働いている労
働者が大勢いるのだ。一級四号はそうした労働者の賃金であるということ京都職員も労働
組合も肝に命じるべきである。(東京・Y)